

子ども食堂 関わり始めた宗教者

困難抱える人に寄り添う、信仰の原点回帰

「子どもの貧困」や社会的孤立などを背景に、全国に広がる「子ども食堂」。その運営に寺や教会が関わり出している。様々な困難を抱える人に寄り添うことは、仏教やキリスト教の理念と一致する。宗教者が自らの原点を見つめる機会にもなっている。

寺・教会が会場 「子の成長うれしい」

「お、来た、来た」。東京・上野の成就院。福田亮雄住職(50)が、うれしそうに声を上げた。障害がある子どもが子ども食堂にやってきたのだ。昨年6月から月に1回開いている。笑い声に包まれるなか、おかわりをする子どもも、40食がすぐになくなった。

「寺は本来、人と人の縁をつむぎ出す場であるはず」との信念がある。しかし檀家の多くは転居し、歩ける距離に残るのは1割ほど。講演会など集いの機会は設けていたが、物足りない。



寺での子ども食堂で配膳を手伝う福田亮雄住職(中央)＝東京・上野の成就院

「寺をもっと躍動させたい」。そんな思いを抱えていた時に「子どもの貧困」のニュースを知り、寺を社会に開こうと決めた。檀家だけでなく構わない。ただ「必要としている人」のために、と考えた。「1人で落ち着いて食べられなかった子が完食できるようにしました。成長がうれしい。活動を通じて、僧侶の役割とは何かを自分に問うている気がします」。

東日本大震災 支援の転機

聖徳太子や光明皇后は救護施設として「施薬院」「悲田院」を開いたと伝えられる。仏教は長く、社会福祉的な領域に関わってきた。だが戦中・戦後にかけて社会保障制度の整備が進むにつれ、伝統仏教などの出番は減った。

社会のセーフティネットの機能はバブル経済崩壊後、急速に弱まる。宗教研究者は、特に2000年代から宗教の公共的な性格に注目。「社会参加」「社会貢献」を評価し始めた。宗教の側も盛んに勉強会を開くようになった。

転機となったのが東日本大震災。被災地支援の経験を経て、貧困や社会的孤立など様々な「苦の現場」での活動が芽生えている。7人に1人の子どもが貧困状態にあるとされる中、子ども食堂もその一つだ。

宗教社会学が専門の大阪大学大学院・稲場圭信教授は言う。「厳しい社会状況を敏感に受け止めた宗教者が現れ、子ども食堂などに関わり出している。『人々と共に生きる』ことの意味を問い、もう一度、自らの歩む道を見つめ、信仰の原点に返ろうとする動きと言える」(磯村健太郎)

寺院で開く子ども食堂を記者が調べたところ、東京都内だけで10カ所以上ある。地方にも広がっている。新潟市にある金宝寺の朝倉奏副住職(59)はボランティア団体を立ち上げ、昨年5月から月1回開く。チラシには「大切なあなたという存在のために安心できる居場所です」。そうしたメッセージを伝える場として機能してきた寺、かつて地元では、食前の祈りなど宗教色は出さない。ただ、思いの中心には聖書の言葉がある。「最も小さい者」―イエスは、力のない人に奉仕することは私にしてくれろとだ、と言う。そう理解し、行動につなげている。「私は神様から多くの恵みを頂いてきました。感謝の気持ちを直接お返しはできません。『最も小さい者』に返していきたい」。

日曜学校や子ども会が開かれていた。しかしこの数十年で活動は衰退した。寺と神社の違いが分からない人もいる。「危機感を持つ僧侶は多い。私もその一人です」。

金宝寺では4年前に小学生向けの英会話教室を始めた。中高生の「無料塾」も開く。生まれた環境で人生の選択肢が狭められるべきではない、との思いからだ。「寺での子ども食堂も、昔やっていたことを復活させているようなくともいいですね」。

キリスト教界も動いた。関係者によると、全国の約30教会が開かれている。首都圏に住むクリスチャンの60代男性は3年前、他の信徒と始めた。教会は場所を貸し、運営は別の団体が担っている。行政と連携しており、また利用者は信徒と限らないためだ。

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。